

萩原雄祐先生を偲ぶ

堀 源一郎（天文）

去る1月29日の寒い朝、名誉教授萩原雄祐先生がおなくなりになりました。心筋梗塞ということで、お年は81歳でした。昨年は、天体力学界の最長老たる先生の80歳をお祝いし、重ねて、先生のライフワークとも言ふべき“Celestial Mechanics”の刊行を記念して、国際天文学連合シンポジウム“太陽系の力学”が開催され、世界中から天体力学者が東京に集まって、先生の長寿と大著の刊行をお祝いしたばかりでした。まことに痛惜の思いです。

萩原先生は1921年に東京帝国大学理学部天文学科を御卒業になり、同年理学部助手兼東京天文台助手、1924年には助教授に昇任、1930年理学博士、1935年

に教授とられました。さらに1944年には帝国学士院会員、そして終戦後は1946年に東京天文台長になられ、以後御退官になるまで、戦災で荒廃した天文台の復興に力を尽されました。先生は当時のことを次のように回顧しておられます。「……終戦の翌年、肺炎から立ち上った私は、自宅が戦災で全焼したので、研究をしようと思っても本はなし、莫大な計算も、書きかけの論文もなくして、悲惨な状態に彷徨していた時とて、せめても次の時代のためと、天文台長に指命されるままに引きうけてしまった。……玉川瀬田の親戚の同居先を暗いうちに出て、新宿の日の出を見、武蔵境から一里近く歩いて三鷹の天文

台に通ったものである。焼けた建物、毀されたドーム、望遠は錆びついていた。……」1954年に先生は文化勲章を受章されましたが、理論天文学における衆知の業績に加えて、この天文台の復興も賞の対象となったに違いありません。

先生の略歴を続けますと、1957年に東京大学を御退官になり名誉教授とされましたが、続いて1960年まで東北大学教授を、さらに1960年から1964年まで宇都宮大学学長をお勤めになり、宇都宮大学の名誉教授でもあります。先生は文化勲章の他にも、1960年に米国のJames Watson賞（天体力学における業績に対して）を、1967年に勲一等瑞宝章、1976年に朝日賞を受賞、そして先生の生前の諸業績に対して、先日、正三位銀盃をいただいたと聞いております。先生の略歴はだいたい以上のようにあります。

天文台の復興と共に忘れてならないのは、先生が大望遠鏡の設置にかけた執念でしょう。日本に大望遠鏡が是非とも必要であることを、天皇陛下に直訴したというエピソードがあります。先生自身、次のように物の本に書いておられます。「……その日は未明に目がさめた。よもや 刑に処せられることもなかろうが、現職をやめさせられることになるだろう。どうせ停年まで長くもないから、次の時代のためにと意を決して講演の原稿に手を入れた。……」これは、1951年、宮中の講書始めでの御前講演のことで、直訴の成果(?)は、岡山県竹林寺山山頂に1960年に建設された188 cm 反射望遠鏡に具体化されて、これまで日本の天文学に寄与してきた功績は計り知れません。

先生が御退官になった1957年に、筆者は大学院博士課程の2年生で、したがって、先生の講義を、教養学部第4学期の天文学概論だけではなく、麻布飯倉にあった天文学教室で本格的に聴講した（新制では）数少ない学生の一人です。天文学科（当時は物理学科天文）の学生は、ひとクラスが高々数名で、

全員が講義室の最前列に席を取れるから良いのですが、先生は、馴れないと判読できかねる数式と文字を、猛烈な速度で（したがって薄い字で）書き進み、黒板いっぱいになるやいなや、惜しげもなくさっと消してしまう、という習慣をお持ちでしたので、なかなか大変でありました。しかし、かの分厚いR. H. Fowlerの“Statistical Mechanics”を数回の講義で片づけてしまう、などのことは、この故に可能であったわけです。

先生は天体力学、天体物理学両分野の講義をされておりましたが、その前者の講義ノートは、1975年度朝日賞の対象となり、1976年に出版された、上述の大著“Celestial Mechanics”の前哨となったものです。全5巻9冊5560頁（文献5000余点）には、ラプラス以降の200年間の天体力学の諸成果が凝縮されており、先生は本書をup to dateに保とうとするあまり、印刷中に発表される新文献を次から次へと追加していくために、校了がおくれにおくれて、初めの本屋さん、米国のMIT Pressは第2巻3冊までで降りてしまったくらいです。第3巻以降は文部省の刊行助成金を得て日本学術振興会に引継がれたという次第です。

先生は専門分野の著作の他に、多数の名文章を残しておられます。その昔、国文学者折口信夫に師事されて和歌、俳句、漢詩などに堪能であったことも聞いております。「一目渺茫たる沙漠に疲れはてた旅人は日暮れむとして地平線の遙かあなたのオアシスを夢みる。蒼穹にきらめく銀河の彼方のかすかなる愛の子守歌を夢みる。遙かなる星、遙かなる銀河、そこに人生の詩がある。行路の涙がある。そこに輝ける希望があり、永遠の愛の揺籃がある。……」これは「星雲の彼方に」の序文の初まりの文章で、筆者が新制東京大学に入学した年に発行され、当時の若かりし筆者の、天文学への情熱をかき立てた思い出深い文章であります。つつしんで先生の御冥福をお祈りいたします。